

## 明治二十六年における子規俳句の独自性

はじめに

柴田 奈美

### 要約

俳句分類の作業によって、古句の特別な用語や型、発想を参考にし、て句作を試みる一方で、古句を模倣することなく、子規独自の句もこの時期かなり作られていた。このことを次の五点から子規の俳句を分類し、具体的に例句を挙げることによって明らかにした。(一) 写実的な句 (二) 感覚的な句 (三) 晩年の境涯句につながる句 (四) 吟行による平凡な景色を作品化した句 (五) 「根岸」の俳句

明治二十六年は、自分の発想を、伝統をふまえつつも、こなれた表現で俳句化していくとする子規の成長過程の窺われる年であった。

キーワード 明治二十六年の子規俳句、子規俳句の独自性、

俳句分類作業

明治二十六年を、子規は「瀬祭書屋俳句帖抄上巻」を出版するに就きて思ひつきたる所をいふ」(以下「俳句帖抄序」と略す)の中で、「前年に実景を俳句にする味を悟つて以来爰に至つて濫作の極に達したやうである」(「ホトトギス」明治三十五年二月「子規全集第五巻」四六四頁)と述べているが、分類俳句の作業によって、古句の特別な用語や型、発想を基にした句も少なからず作っていた。

本稿では、古句の特別な用語や型、発想を模倣することなく、子規独自の句もかなり作っていたことを、具体例を挙げて指摘しておきたい。

### (一) 写実的な句

(1) 苗代の泥足はこぶ絵踏哉 子規(『子規全集第一巻』一八九頁) 子規はこの句を「絵踏」を季題として分類している。「絵踏」(「踏絵」)は、『俳諧歳時記葉草』をはじめ、春の季題として江戸時代の歳時記に掲載されているが、例句はなく『分類俳句全集』にも採録されていない。空想による句であろうが、「苗代の泥足はこぶ」が写実的表現である。また、「絵踏」という季題そのものに物語性を感じられる。

### (2) 卷わらのとれて蘇鉄のそよぎ哉 子規(一八九頁)

「巻藁を解」が季題だが、『分類俳句全集』には採録されていない。卷わらが取られたとたん、春風に蘇鉄の葉が心地よげにそよいだ、

との意。「蘇鉄のそよぎ哉」に写実性がある。

(3) 垣こえて又低く飛ぶ胡蝶哉 子規(二二七頁)

「低く飛ぶ胡蝶」には、

野を低く遊ぶ胡蝶や葦草 吟江「心の花」第二卷二六五頁の古句がある。子規の場合「垣こえて又」とあることから、低く飛んでいた蝶が垣を越えるために高く飛び、垣を越えた後、又低く飛んだことがわかる。蝶の動きが動画的に表現されている点が子規の工夫である。蝶の動きがよく観察された句である。

(4) 糸桜下の方より咲きにけり 子規(二二七頁)

平淡な句柄であるが、『分類俳句全集』に類句はない。糸桜の句としては、柳との取り合わせの句、「糸」との縁語から「染める」「切る」「もつる」「解く」などの表現が多用されている、観念的な句が多い。「下の方から咲きにけり」は、実際に糸桜を注視した時の発見であろう。

(5) 月の出や皆首立て、小田の雁 子規(二六一頁)

「皆首立て、」が子規の発見である。「小田の雁」は伝統的によく詠まれているが、「飛ぶ」「鳴く」「落ちる」といった表現で詠まれている。

(6) 朝市や鯛にかぶさる笹の露 子規(二三八頁)

東北地方旅行中の一句。さまざまなものを売る朝市の素材の中で

特に鯛に着目し、「鯛にかぶさる笹の露」と具体的に表現し、「笹の露」に焦点化していく手法をとっている。朝市のすがすがしさと、「鯛にかぶさる笹の露」がイメージ的もつながった取り合わせであり、類句のない佳句と評価できる。

(7) しくるゝや檐より落つる枯あやめ 子規(三九三頁)

「檐より落つる枯あやめ」が写実的である。五月、軒に置いていたあやめが、冬までそのままになっており、時雨とともに軒より落ちてきた。軒より落ちる瞬間を詠んだもの。季節をはずれたもの、すさまじさを感じる。

古句には、

いかにせんしくれの跡の枯柳 淡々「句集」第九卷四四五頁がある。あるいは発想の基になったかもしれないが、その跡をとどめてはいない。

因みに、『徒然草』百三十八段に、葵祭の済んだ後葵を捨てないで枯れるまで御簾にかけておいた和歌や「枕草子」「四季物語」の紹介がある。あるいは発想の基となつているとも考えられる。

(8) 椽に干す蒲団の上の落葉哉 子規(四〇八頁)

椽に干し上げた蒲団の上に、ひらひらと落葉が落ちてそのまま載っている。蒲団と落葉の取り合わせは新しい。蒲団の上に落ちた落葉に目を留めた子規の観察眼の確かさが窺われる。

(9) 海苔搔の股の下なり安房の山子規(二二七頁)

海苔搔をしている股の下に、遠方の安房の山がみえる、との句意。

「股の下なり安房の山」の表現に、構図・視点の面白さが指摘できる。

因みに、「股の下に山が見える」という構図には、葛飾北斎の「絵本『富嶽百景』」の「三編挿絵 跨ぎ不二」がある（『小学館ギャラー新編名宝 日本の美術第三巻 北斎・広重』小学館 一九九一年二月 二六頁）。これは、風呂桶を作っている二人のうち一人が、風呂桶の縁に股がつて立っている。その股の間から富士が見える、という奇をねらった構成である。

あるいは、このような絵の構図からヒントを得た可能性も考えられるが、子規の場合、「海苔搔の股の下に安房山が見える」という内容が新鮮である。

遠近法による構図の感じられる句は、他に、

菜の花の野末に低し天王寺

子規（二四二頁）

がある。近景から遠景にかけて広がる菜の花畑。その遠方（野末）に、天王寺が低く見える、という句。

## (二) 感覚的な句

### (1) 一籠のこき紫や桔梗壳

子規（三七二頁）

東北旅行中立ち寄った朝市の場面の一句。

桔梗の花の紫色の色彩美を詠んだ古句は、意外と少ない。『分類俳句全集』には

紫の中に淋しき桔梗哉

斗久「月影塚」第九卷七六頁

紫に見よや桔梗を手向草

几童「井華」第九卷七七頁

の二句が見えるのみである。子規の場合、「こき紫」ととらえた点に個性が出ている。籠にびっしりと活けられた桔梗は、こき紫の一塊に見えたのであろう。「紫の花」ではなく、「こき紫や」と色彩そのもので桔梗をとらえている点に、感覚美が指摘できよう。宮坂氏は「どこか見すごしがたい艶がある」（『子規秀句考』明治書院 平成八年九月 四六頁）と評価しておられる。

このような色彩感覚的な句として、

炎天の色やあく迄深緑

子規（二五四頁）

を同時期の句として挙げられるが、この感覚は、明治三十五年の作  
黒キマデニ紫深キ葡萄カナ

子規（『子規全集 第三巻』四七三頁）

につながるものであろう。因みにこの句は、明治二十五年の句、

真黒に茄子ひかるや夏の月

子規（七五頁）

を感覚句として挙げた時にも取り挙げた。

### (2) 花の空薄紅に曇りけり

子規（二二一頁）

花曇りの色を「薄紅」という美しい色彩で把握。このような「色彩美」を描いた句としては、

山吹の垣うら白し小米花

子規（二二九頁）

井戸ばたにこはれて白し小米花

子規（二二九頁）

などがある。「小米花」は伝統として「米」への連想表現はあるが、白の色彩美を中心としたものはない。子規の特色がよく出ている。

### (3) 山陰に虎杖森の如くなり

子規（二二九頁）

虎杖の群生を「森の如くなり」と直感したのである。一見大げさな表現のように思われるが、太く高く伸びた虎杖の群生している様子が、イメージできることも確かである。

(4) 涼しさや羽生えさうな腋の下 子規(二六〇頁)

「七月二十六日岩代飯阪温泉にて夢中の句」との前書がある。東北旅行中の句。「羽生えさうな腋の下」とは、自由奔放な感覚的な表現である。涼しい心地よい気分の中に、夢の中で天使に化身しようとしたのであろうか。浪漫性も漂う句である。

(5) 風吹て聖霊いそぐ帰り道 子規(三三九頁)

一陣の風に、黄泉の国にいそいでもどる聖霊を感じとったのである。見えざるものを感じる感覚。このような句は他に、  
風吹て鬼逃げて行くけはひあり 子規(三九一頁)  
がある。浪漫的な子規の性質の窺われる句である。

(三) 晩年の境涯句につながる句

(1) 鶯の梅に下痢する余寒哉 子規(二二〇頁)

「病中」との前書がある。「鶯」と「糞」の取り合わせの古句には、  
鶯が椿の小枝に糞をして 鬼貫「をたまき」第二卷一二六頁  
鶯や餅に糞する掾の上(注二) はせを「泊船」第二卷一四一頁  
があるが、子規の句の場合は、鶯に病気の自分自身を投影している点が指摘できる。この点が、「梅に鶯」という雅の世界に俳諧性を持ち込むことを目的とした鬼貫や芭蕉の句との違いである。病中の自

分を投影した鶯は、梅の木に止まり、下痢をしつつ余寒に耐えているのである。

このように、対象に自己を投影した句には、

うらゝかや見つめる空も病み上り 子規(一八六頁)  
がある。このような句は、芭蕉の

病雁の夜寒に落て旅寝哉 はせを「猿蓑」第八卷三四頁の句などが発想の基としてはあるのかもしれないが、模倣の跡をとどめず、自分の境涯句として表現できている。

(2) 定めなき身を五月雨の照り曇り 子規(二八八頁)

「瘧疾にかゝりて」の前書がある。「モノ」に托さず、自分自身を詠んだ句である。「定めなき身」の境涯と、うつとうしい「五月雨の照り曇り」という情景描写がイメージ的につながっている(注二)。

このような病気の自分自身を詠んだ句は、この他に

いたつきに名のつき初る五月雨 子規(二八八頁)  
頤の鬚に風あり五月晴 子規(二八九頁)

病中

夜を眠る葉つれなし子規 子規(三〇〇頁)  
などがある。「夜を眠る葉つれなし子規」の句は、古句の

翌の夜は寝させてくれよ時鳥

千代尼「古今句鑑」第五卷一七三頁  
夏瘦は夜を寝ぬ故そ時鳥 秀和「其袋」第五卷一七二頁  
時鳥来べき宵也頭痛持 在色「談林十百韻」第五卷一五三頁  
などの「病」のイメージ(特に不眠)と「時鳥」との取り合わせ、

また

村雨や声の典葉鵲

重頼「犬子」第五卷九〇頁

待よわる気付葉そ時鳥

常人「毛吹草」第五卷一八四頁

などの「葉」と「時鳥」の取り合わせを詠う伝統を踏まえたものであろう。しかし、模倣の跡は感じさせず、切実な不眠の苦しみを表現している。伝統に自分の境涯を重ねた句といえる。

(3) 医者が来て発句よむ也初しくれ 子規(三九三頁)

人の来て咲くといふなり杜若 子規(三一九頁)

どちらにも「病中」との前置がある。俳句三昧の子規の庵には、弟子や知人が病気の子規のために、句材を提供しに代わるがわる訪ねてきた。病でありながら、文芸的交流の場であった子規庵の様子が、このような句から窺える。

(4) 一枝は薬の瓶に梅の花 子規(二二二頁)

「病中」との前置がある。薬の瓶を花瓶として使って梅の花を一枝活けている。古句には、

瓶に見る枝は算木か梅の花 善勝「洗濯物」第二卷三六四頁

無理にさす瓶はこけたり山桜 心圭「苧環」第二卷五〇六頁

など、「瓶」の「花」との取り合わせがあるが、子規の句の場合「薬の瓶に」という表現に、境涯が集約されている。無造作に薬の瓶に活けられた梅の花だが、病中の子規の目を楽しませているのである。

(5) 五月雨や病の窓の西日影 子規(二八九頁)

五月雨が降り続いている。病中の自分は外に出られないまま、窓を眺めていると、西日が差し込んできた。雨が上がつて晴れてきたのだな、と心が少し晴ればれとしてきた、との句意。病中のふさいだ気持ちに「窓の西日影」によって少し癒されたことが感じられる。「病の窓」という緊縮した表現に工夫が窺われよう。

(6) 蚊をたたくいそがはしさよ写し物 子規(三〇七頁)

寒川鼠骨が「正岡子規の世界」(青蛙房 昭和三十一年十月 復刻版 六法出版社 一九九三年 三三頁)の中で指摘しているように、

「俳句分類などに従事してゐた居士の特殊境遇が躍然として現れてゐる」といつてよい。

この句の他に、子規の境遇の表れている句として、

薪を割るいもうと一人冬籠 子規(二八六頁)

来あはした人も煤はく庵かな 子規(三九一頁)

瀬祭書屋

しぐる、や写本の上に雨のしみ 子規(三九九頁)

を鼠骨は挙げてゐる。この他に、

我書て紙魚くふ程に成にけり 子規(三〇九頁)

古書幾巻水仙もなし床の上 子規(四二二頁)

を挙げておく。両句ともに、分類俳句作業の様子を示すのであろう。あからさまに古句の表現を借らず、平淡な表現で自分の日常生活を描いているに注目したい。

(四) 吟行による平凡な景を作品化した句

平凡な景色を俳句化しうることの発見は、明治二十五年末に既に気づいており、実践していた。この年は、それをひき続き実践したことが、次に挙げる句によって窺われる。

(1) うれしさや小草影もつ五月晴 子規(二八九頁)

「小草影もつ」が写生。五月晴のよい天気になって、明るい道々に生える小草に、それぞれ小さな影が見える。小草に影を発見した喜びに、五月晴の日の喜びが集約されている。

(2) 背戸あけて家鴨よびこむしくれ哉 子規(三九三頁)

郊外の農家の一風景であろう。

夕立や家をめくりて啼く家鴨 其角「五元」第四卷(二二二頁)  
が、あるいは発想の基になっていたとも考えられるが、模倣の跡はとどめていない。このような牧歌的な句として、次のような句が挙げられる。

稲刈て近道もどる牛のむれ 子規(三七八頁)

牛つんで渡る小船や夕しくれ 子規(三九四頁)

牛むれて帰る小村のしくれ哉 子規(三九五頁)

(3) 山吹や人形かわく一むしろ 子規(二四〇頁)

山吹の花の咲く山里に、人形をつくる家があり、着色した人形をむしろに置いて乾かしている、という明るい情景。「人形かわく一むしろ」が、類句のない、子規の発想である。

「山吹」は伝統的には、

山吹や垣に干したる蓑一重 闇指「続猿蓑」第三卷三六〇頁  
山吹はつらく黄なる日なた哉

正与「あやにしき」第三卷三四頁  
のように、日なたのイメージがある。これを継承し、新たな山里の実景を発見し、取り合わせたのである。

(4) 菊枯て垣に足袋干す日和哉 子規(三八八頁)

菊も枯れた冬の季節、あたたかな日ざしのよい日和、垣には足袋を干している。花のない垣根に白い花が咲いたような冬の庭の明るい光景が目につく。「足袋」は「はく」「ぬぐ」という表現で詠まれており、「干す」はない。近所を散策した折の、子規の発見であろう。

明治二十六年の句材の特色として、「根岸」を詠んだ句の多いことが挙げられる。

根岸に引越してきたのは、前年の明治二十五年二月であるが、その年に根岸を詠んだ句は次の二句のみである。

根岸 子規(七九頁)

五月雨やけふも上野を見てくらす 子規(七九頁)

根岸草庵

我庵や露にまじはる蟋蟀 子規(一三三頁)

これが、明治二十六年になると三十六句(注三)に急増していることが指摘できる。根岸には、子規の深い思い入れのあったことが窺われる。

子規の後半生をよく知る中村不折は、「子規談片」(「趣味」明治四

十五年四月)の中で、次のように子規が根岸を語ったことを紹介している。

「又ある時、『昔は文学者、美術家は沢山根岸に居た、今は牛込や向島に四散して仕舞つた、自分がつらつら考へるに文学者や美術家が根岸を去るのは死刑を宣告されたと同じである、其証拠には露伴でも篁村でも有名な小説家の傑作は根岸時代に来たものだ、其理由は彼等は根岸に居る程、勉強するに便な処はない、根岸たるや特有の便がある上野に近く本郷に近く、図書館の便あり且つ書物を求むべく本屋の多い地に遠くもない、加へて博物館や動物園も目の前にある、一朝何か疑問が起れば一時間位で直に解決ができる、其上に閑静で読書にも適している(中略)自分は飽く迄も此根岸を離れぬ覚悟だ、根岸の土となるのが願である』と僕に話してゐた」。

このような根岸という土地へのあこがれから、明治二十五年二月、新聞「日本」の社長陸羯南の知らせで、上根岸八十八番地に家を借り、根岸の住人となつたのであつた。

根岸は、江戸時代から文人墨客の住む、閑静で風雅な地域であつた。そのよさが、明治期にも存続し、子規が学生時代に尊敬し、その文章をまねた饗庭篁村、高尚優美な「風流仙」を書いたとして心酔していた幸田露伴らが住み、「根岸派」と呼ばれて、文壇で活躍していたことは、前掲の子規の話にも出てきたとおりである。

文学活動をするうえで、研究に便利という現実的な点に加え、永い風流の歴史をもち、あこがれの文学者も住んでいた点においても根岸に魅かれていたと考えられる。

このような根岸を、どのように俳句作品に取り入れていたのか。数例挙げておく。

# (五) 「根岸」の俳句

(一) 雀より鶯多き根岸哉 子規(二二〇頁)

「根岸六句」の前書がある。

この他の五句は、次のとおり。

鶯や年々ふゑる梅の花 子規

摺小木に鶯とまる根岸哉 子規

鶯や隣へ通ふ犬くゞり 子規

鶯の糞の黒さよ篠の雪 子規

鶯の黒焼もかな上根岸 子規

根岸は、鶯・梅・豆腐「篠の雪」が有名であつた名所であり、それをふまえて、鶯の句を作っているが、これらは、古句をふまえていると考えられる。たとえば「雀より」の句は、

鶯を雀かと見しそれも春 蕪村「句集」第二卷一一四頁

鶯や根岸あたりの竹裏館 芝水「拍掌千句」第二卷一二五頁

「摺小木に」は奇抜な表現だが、

鶯は長刀にのる若衆かな 支考「泊船」第二卷一三五頁

が、発想の基になっているだろう。また、この時期に子規が知っていたという確証はないが、一茶の句に、次のような句がある。

鶯の柄に鶯なくや小梅村 一茶「記入なし」第二卷二二九頁

「鶯の黒焼もかな」の句は、

黒焼にせしは何もの時鳥

白雄「白雄集」第五卷一五四頁

黒焼の妻や鳴くらん時鳥

蓼太「蓼太集」第五卷一七九頁

などの「時鳥」の句から発想されたものであろう。このような、古句を発想の基として作られた「根岸」の句も、もちろんあるが、次に挙げるのとおり、子規なりの表現・発想で、根岸を読もうと努力していた。

(2) たんぼ、や根岸あたりの貸地札

子規(二三九頁)

句の中に「根岸」の地名を入れて詠んでいる。この他に、次の句がある。

水無月や根岸涼しき篠の雪

子規(二四四頁)

(3)

根岸

ふらくと行けば菜の花はや見ゆる

子規(二四一頁)

「根岸」の前書を付けた句である。「菜の花」は、「井手の里」が伝統的によく詠われている。根岸と菜の花という新しい取り合わせに、子規の工夫が窺われる。

この他に、「根岸」の前書のある句としては、

我庵は汽車の夜嵐時鳥

子規(三〇〇頁)

老鶯若時鳥今年竹

子規(三〇四頁)

古沢や家居の中に水鶏鳴く

子規(三〇四頁)

などがある。

根岸草庵

(4) ありく丈の庭は持ちけりけふの月

子規(三五四頁)

自分の住居「根岸草庵」の前書を持つ句。そう広くはないが、あるく丈の庭はある根岸草庵に、子規は満足しているようだ。この他、

我庭や上野の花の花吹雪

子規(三三〇頁)

三尺の庭に上野の落葉かな

子規(四〇八頁)

などは、名所の上野の山との関係で「わが庭」を詠んだもの。また、

紅梅の隣もちけり草の庵

子規(二三三頁)

は、「隣に住む」陸羯南との関係で自分の庵を詠んだものであろう。

芭蕉破れて書読む君の声近し

子規(三七七頁)

には、「羯南氏住居に隣れば」との前書がある。この句は、

鶴なくや其声はせをやれぬへし(注四)

はせを「雪丸け」第九卷八五頁

が発想の基になっていることが想定できるが、鶴の気品がそのまま羯南の人柄に通じており、効果的な古句の継承による作品と考えたい。

おわりに

明治二十六年、子規は芭蕉の「おくの細道」を慕って、東北旅行に出掛けた。実景を俳句にすることの面白さを知ったのは前年のことであったが、旅をして実景に興味を抱きつつも、その意匠や表現には、古句を利用した場合の少なからずあったことを別稿で指摘した。

と同時に、本稿で指摘したように、子規の観察眼の働いた句、視



覚派、感覚派の子規の個性の窺われる句が作られていた。

前年に比べて、大きく増加の傾向にあった句は、次の二点である。

まず、晩年の境涯句につながる病中の自分や自分の周辺を詠んだ句が挙げられる。不眠に悩み、癪を病む時期のあったことが、句作につながったものであるが、句材として自分の病を取り挙げようという姿勢のあったことに着目しておきたい。

二点目は、愛着のある根岸を句材として積極的に詠もうとしていたことである。根岸に引越してきたのは昨年であるが、この年に急激に根岸を詠んだ句が増えたのは、詠みたい内容を俳句として表現する技術が高まったことを示していると考えられる。

自分の発想を、伝統をふまえつつも、こなれた表現で俳句化していかうとする子規の成長過程の窺われる年であった。

注(一) 「葛の松原」には「鶯や餅に糞する椽のさき」とある。

(二) 赤羽学『芭蕉俳諧の精神 総集篇』(清水弘文堂書房 一九九四年十一月) 所収の「第十二節 芭蕉の『を』の用法」四一七頁(四三四頁参照)。「を」によって二つの物をイメージによって結ぶ芭蕉の用法が詳述されている。子規のこの句の「を」もイメージによってつながっていると鑑賞したい。

(三) 『子規全集』第一卷三七七頁の「羯南氏住居に隣れば」の前書をもつ句を含む。

(四) 「曾良書留」には「鶴鳴や其声に芭蕉やれぬべし」とある。

#### 引用・参考文献

『子規全集』(講談社 昭和五十年)

『分類俳句大観』(日本図書センター 一九九二年四月) 『分類俳句全集』の復刻版

『校本 芭蕉全集』(富士見書房 昭和六十三年・平成二年)

『図説俳句大歳時記 春』(角川書店 昭和三十九年四月)

赤羽学『芭蕉俳諧の精神 総集編』(清水弘文堂書房 一九九四年十一月)

中村不折『子規談片』(趣味 明治四十五年四月)

寒川鼠骨『正岡子規の世界』(六法出版社 一九九三年十一月)

宮坂静生『子規秀句考―鑑賞と批評―』(明治書院 平成八年九月)

古俳句の表記、及び出典は『分類俳句大観』に記されたものによる。但し、原則として「前書」は省略した。

引用に際しては、旧漢字のうち常用漢字の使用が指定されているものは漢字に改め、ルビは省略した。

平成十年 十月三十日受付  
平成十年十二月二十五日受理